

2020. 10. 25 第四主日礼拝

I コリント 9:19-27 「救いの恵みをとともに受けるために」

## 聖書

- 19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。
- 20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには——私自身は律法の下にはいませんが——律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。
- 21 律法を持たない人たちには——私自身は神の律法を持たない者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者のようになりました。律法を持たない人たちを獲得するためです。
- 22 弱い人たちには、弱い者になりました。弱い人たちを獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。
- 23 私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをとともに受ける者となるためです。
- 24 競技場で走る人たちはみな走っても、賞を受けるのは一人だけだということを、あなたがたは知らないのですか。ですから、あなたがたも賞を得られるように走りなさい。
- 25 競技をする人は、あらゆることについて節制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。
- 26 ですから、私は目標がはっきりしないような走り方はしません。空を打つような拳闘もしません。
- 27 むしろ、私は自分のからだを打ちたたいて服従させます。ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者にならないようにするためです。

## はじめに

何かを成し遂げようとするときに大切なことは軸がぶれないことです。そのためには目的を明確にすることが必要で、目的遂行型の取り組みは必ず実を結んでいくと信じています。十数年前に出版されたリック・ウォレンの「人生を導く5つの目的」という本があります。その本は教会やクリスチャンの生き方に大きな影響を与えました。「あなたは何のために生きているのか」という問いに対して「あなたは偶然に存在しているのではない」という、人が生きることには目的があるという話から始まります。具体的に5つの目的を上げています。「あなたは神の喜びのために造られた」「あなたは神の家族となるために造られた」「あなたはキリストのようになるために造られた」「あなたは神に仕えるために造られた」「あなたは使命のために造られた」というものです。

今日取り上げる聖書箇所には、パウロは何のために生きているのかという問いに対する明確な答えが書かれており、それがブレないことを見ます。また目的遂行のためなら自分を譲ることをよしとする自由が記されています。今日の教会またはクリスチャンの歩みに学ぶことの多い箇所かと思います。

### 1. ブレない目的を持つ

パウロの目的はイエスさまを宣べ伝えることでした。この一点に集中してブレなかったのが彼は力強い働きをすることができたのです。多くの困難を抱えながらもブレないことは簡単ではありません。たとえばⅡコリント11:23-27にはパウロの伝道がどれだけ困難だったのかが記されていますが、それでも彼の奉仕はブレませんでした。

「彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうです。労苦したことはずっと多く、牢に入れられたこともずっと多く、むち打たれたことははるかに多く、死に直面したこともたびたびありました。ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、口

一人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難にあい、労し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたこともありました。」（Ⅱコリント 11:23-27）。これだけ大変な中、良く投げ出さないで奉仕してきたものと驚きます。

パウロとは違うかもしれませんが、私たちの人生も困難の連続です。“もう無理です”と投げ出したらどんなに楽だろうかと思いつつも、投げ出さずに歩んでいます。それは私たちが強いからではなく、背後でイエスさまが力強く支えてくださっているからです。パウロがイエスさまを伝えることに集中できたのは、彼の強さではありません。後にパウロ自身が次のように証しています。「私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。」（Ⅰコリント 15:9,10）。パウロの宣教活動は人間的な強さとか頑張りによってではなく、神さまの恵みと助けによったのです。

## 2. 柔軟な対応と広い心

芯がブレないことを「頑固」という人がいるかもしれません。頑固は人の意見を聞かない人であって、芯がブレない（芯が硬い）人のことではありません。私たちの周りには色々な考えを持った人がいて、自分とは異なる考えを持った人もいます。そのような人と交わるためには、自分を相手に合わせる事が求められます。それは簡単なことではありませんが、確たる芯を持った上で、周りの方々に合わせる自由を持てるようになりたいと思います。

この点でもパウロは卓越していました。ユダヤ人を獲得するために「ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。」「律法の下にある人たちには、律法の下にある者のようになりました。」(20 節)と言い、「律法を持たない人たちには、律法を持たない者のようになりました。」(21 節)と言っています。旧約を重んじる人たちには自分も律法を守り、その人たちと同じようになり、異邦人に伝道するときは律法を振りかざすようなことはせず、異邦人と同じようになりました。「弱い人たちには、弱い者になりました。」「すべての人に、すべてのものとなりました。」(22 節)と、まるで自分がなくなってしまったかのように自在に人に合わせています。それは「何とかして、何人かでも救うためです。私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをとともに受ける者となるためです。」(23 節)と、ここでも目的が堅持されていることを見ます。

ここで言われていることは、人に合わせるという行為が問われているわけではありません。行為ではなく心です。ユダヤ人にはユダヤ人が大切にしていることに自分も心を合わせることを大切にしているのです。パウロにとってユダヤ人が大切にしている律法は、すでにイエスさまの福音によって意味のないものとなっています。だからと言って、律法を大切にしているユダヤ人に“律法など意味がない”と言ってしまったら、途端に心を閉ざしてしまうでしょう。どんなに正しいことでも、相手が心を閉ざしてしまったら届かないです。パウロが相手に合わせたのは、相手の視点に立ち、相手の興味に合わせることで、私はあなたに関心があります。あなたに興味を持っていますというメッセージを伝えているのです。

パウロの姿勢はセールストークでもなければ方便でもありません。愛による配慮です。配慮の先にあるすばらしい恵みの世界、すなわち神から栄冠を受けるといふ恵みの世界を仰ぎ見ているので、その世界に一人でも多くの方々と共に行くために、最大限の配慮をしているのです。これは私たちが誰かに福音を届けようとするときの大切な視点ではないでしょうか。神の国へ

の間口は広く開けておく必要があるのです。すなわち、どのような動機であれ神さまを尋ね求める方々を拒んではいけないのです。すべての人が神の国へと招かれているのです。願わくは招きに応じて、救いをご自分のものとされる方が起こされるように祈っています。

### 3. 普段の信仰生活が大事

イエスさまを信じて救われることは、神さまが見せたいと願っておられる世界の入り口に立つことであり、ゴールはその先にあります。クリスチャンのゴールは神さまから「朽ちない冠を受ける」(25 節) ことにあります。朽ちない冠を受けるために、パウロは競技者を例に上げています。競技者は勝利という目標を掲げ、目標に向かって練習します。その姿はクリスチャンがゴールである天国に向かうのと同じだと言うのです。競技者が厳しい練習に耐えるように、クリスチャンも「自分のからだを打ちたたいて服従させる」とか「自分自身が失格者にならない」ために自分を律することが求められています。厳しい表現になっているのはコリント教会の実情が背景にあるものと思われまふ。ここで大切にされなければいけないことは、朽ちない冠というゴールに向かう途上の歩みが重要だということです。

ゴールに向かう途上の歩みのことを信仰生活というのですが、その歩みの大切さは「参加することに意義がある」というオリンピック精神にも表されています。このことばは 1908 年第 4 回ロンドンオリンピックの時に、当時の IOC 会長のクーベルタン男爵が演説の中で語ったものだそうです。スポーツが米英の対立に発展してしまったことを憂いして「オリンピックで最も重要なことは、勝つことではなく、参加した、ということである。これは、人生において最も重要なことが、成功することではなく、努力した、ということと同様である。本質的なことは勝ったかどうかではなく、よく戦ったかどうかにある。」と語られました。競技においてどのように戦ったのが大切なのです。それはそのまま信仰生活に当てはまります。私たちはどのように信仰生活を送っているのかが問われており、その歩みに報いる形で冠が用意さ

れているのです。クリスチャンは天国に帰ったときイエスさまから「よく戦って来た」とねぎらっていただけることを信じています。私たちの歩みは困難の連続ですが、そのすべてをご存知のイエスさまが、「よく戦ってきた」と報いてくださる日が用意されていますから、困難に負けないで今日も明日も信仰の道を歩んで行きましょう。

### まとめ

福音のために生涯をささげたパウロの姿勢を学びました。彼はイエスさまを伝えるために人々に合わせる柔軟さを持っていました。私たちが、～でなければならないという強い縛りを持っていると、自分の主義主張に合う人しか近づくことができなくなってしまいます。神さまはすべての人を招いておられるのですから、私たちも神さまの広さに倣い、より多くの方々を愛して歩んで行きたいと思います。そして、共に信仰の道を歩むことで支え合い、助け合って行きましょう。その先にある神の栄冠と一緒に受け取らせて頂きたいです。